「入試改革」と「高大接続」における課題とは

待ったなしの大学改革をさらに推し進めるために、文部科学省が2014年度から行っている「大学教育再生加速プログラム（AP）」。その中でも注目を集めている「テーマⅢ 入試改革・高大接続」に採択された大学の取り組みとその成果を紹介します。まず、入試改革と高大接続における大学と高等学校それぞれが抱える課題についてうかがいました。

大学教育センター　教授
藤井 恒人 先生
東京農工大学

次世代才能支援室　教授
野村 純 先生
千葉大学

進路指導部　主任
五十嵐 康之 先生
東京都立 小山台高等学校

大学教育に「加速」した改革が求められる背景とは

野村：自分の成績を基準に大学や学部を選んで入学し、例えば工学部に入ってきたのに、ものづくりに全く興味がないという学生がいます。「この点数ならここが合格できる」ということを言われて、自分の意志がないままに進学し、この学部ではこんなことを学ぶのかと初めて知る学生が実際にいるのです。こうしたミスマッチを減らしたい。高校生に大学ではこんなことを学ぶのだと、きちんと伝えなければならないと感じています。

藤井：センター試験を初めとする今の入試制度が、時代のニーズに応えきれなくなっているのだと思います。知識・技能を中心に評価することを目的としてきたテストに対して、そこで高得点をあげようとする受験勉強は、多様化が進む社会の課題解決を担う人材育成の一部分しか役に立ちません。また、今の高校生には大量の情報が提供されすぎていて、本当にやりたいことが何かわからなくなって、戸惑ってしまうという状況があるようです。もっとシンプルに「自分のやりたいことができそう」「大学って楽しそう」ということで、進路を選択してもらいたいと感じています。

五十嵐：生徒自身にやりたいことがあって、その分野に進ませて、思う存分学ばせてあげたいという生徒がいるとします。でも、「入試」という壁にぶち当たるわけです。入試改革というところで私たちが取り組んでいるのが、教科ごとに表現力を豊かにして発信していける力をつけるということです。また、進路指導においてはキャリア教育の必要性を感じています。本当にやりたいものを見つけて卒業していく、自分の進む方向をしっかりと決められるようにすることが大事だと思っています。そのために本校では「探究型」の研究の取り組みに力を入れています。その中から自分のやりたいものを見つけ、入試に向けても力を発揮してくれればと考えています。

「入試改革」の取り組みにおける課題

藤井：AO入試、推薦入試は高3の秋から始まります。部活とか学園祭とかを最後まで頑張っている生徒は、その場面で発揮しているはずの多面的な能力を評価しようとしても、今のスケジュールでは間に合わないわけです。これは、おかしな話です。好きなものに一生懸命頑張り、集中する生徒は、大学に入学してからも頑張れるはずです。そうした積極的に活動する生徒をきちんと評価できる入試制度であればいいと思います。ただ点数化が難しいところですから、高校と大学の先生間のコミュニケーションが非常に大切だと感じています。普段、近くで一番生徒をよく見ているのが高校の先生ですから、その情報がうまく伝わる関係を作っていきたいと思います。

五十嵐：本校でも秋に運動会があって、それが終わってから受験生になるという面があります。そこからの集中力や伸びは目を見張るものがありますが、あと少しで間に合わないという生徒は毎年います。本当に進みたい分野とは違うけれど、現役優先で進学していくのです。それはもったいないことだと感じます。また、本校では探究型の学習に取り組んでいるのですが、それが入試でどのような形で評価されるのかも気になっています。

野村：高校段階のレベルは、教科書の内容を覚えたり、先生に指示されたことができるかどうかでいいと思うのですが、大学の場合には自分で主体的にやらなければならないので、そうした「兆候」を汲み取れるような評価がされているといいのかなと思います。例えば、理科の実験の時に期待している結果が出なかったので、自ら対照実験などに取り組んでいるということになれば、この生徒には何か見るべきものがあるということになるでしょう。そうした「兆候」を高校と大学の先生が同じ目線で評価ができればいいのかなと思います。

いかにして「高大接続」の成果を上げるか

野村：多くの高大接続の取り組みが行われている中で、どこの大学がどのような取り組みをしているのかを高校の先生に見極めてもらいたいと思います。例えば千葉大学は課題研究指導を通して高校生の探究力・発信力を高める取り組みをしているのですが、何でも受けるというのはマンパワー的に無理なので、高校生に企画書を出してもらって、その後面接を行い、それに通ったら大学で面倒を見るという取り組みを行っています。

五十嵐：高校側では、そうした大学側の取り組みの情報を提供していただいたり、生徒を大学の模擬授業に参加させるなどで見てもらったりして、手探りで大学がどういう学生を求めているのかを見ていくしかないと考えています。でも高校3年間で学んだ子細な部分を、確実に大学に伝えられるのか、そこをどう見ていただけるのかという不安はあります。

例えば、本校の探究型の学習では自分で課題を設定して取り組んでいますが、自分たちだけで解決できないこともあります。そうした時に大学の先生に聞きに行くことは可能でしょうか？

藤井：高校生が真剣に取り組んでいる課題であれば、きっと適任の教員をご紹介できると思います。まず各大学の高大接続の窓口に相談したらどうでしょう。また、私は高校の先生方にも、大学に足を運んでほしいと思っています。大学生が実際に講義を受けている状況なども見てもらい、大学に対する意見や要望も聞かせてもらえる機会を作りたいと考えています。もっと高校と大学の教員間のパイプを太くできたらいいですね。

五十嵐：確かに、生徒には「大学のオープンキャンパスなどに行け」と言いながら、自分たち教員は行けてないですね。これから先どういう人材を社会や世界に送り出すかということを、「高校から大学に送り出す」という視点ではなくて、その先を見据えて高校と大学が同じ視点で「こういう人材を世の中に送り出したい」という連携ができることが理想です。うちの高校には、こんないい人材がいますから、大学で引き続き伸ばしてやってほしいという形で、高校側が大学側にバトンを渡せれば、その生徒にとっても、日本にとってもいいことだと思います。